

私の青空

登場人物

1. 青山 彩
2. 空野 翼
3. 大場サチ
4. 白井ユカ
5. 雲井 瞳
6. 湧田龍之介

7. 松本洋子先生
8. 神岡光二郎先生
9. 杉山美樹先生

10. 風見 翔
11. 雨宮 ^{わたる}航

大雨洪水警報

◆大雨

雨の音が響いている。

幕が上がると、舞台は、十月のある金曜日・文化祭前日の私立七つ森学園中学校三年一組の教室。

舞台前面に校庭側の窓がある。(ただし、あるという想定で実際の舞台に窓は存在しない)

下手は教室の前、上手は教室の後ろ、舞台奥は廊下側になる。

三年一組の展示のテーマは「太平洋戦争」である。

教室は太平洋戦争に関する掲示物で囲まれている。

ただ掲示物は壁に貼られているのではなく、壁の前に立てられた衝立に貼られている。そのため、掲示物の裏側に人が入ることができる。

展示は大きく三つに分かれている。

舞台下手は戦時中の私立七つ森学園(戦時中の名称は私立七つ森高等女学校)と戦時中の少年・少女についての展示。

舞台中央は太平洋戦争全般(主な内容は特攻、空襲)の展示。

舞台上手は戦時中の大衆文化(音楽、映画、小説等)と家庭生活(食事、服装等)の展示である。

舞台上には机がばらばらに置かれていて、その上には展示の資料、作りかけの掲示物、CDラジカセ、暗闇の中で展示物を照らすための複数の非常用ランタンなどが置かれている。また見学者がくつろげるように、椅子が展示物の前に置かれている。

三年一組の六人の生徒が教室の中で展示を完成させるための作業をしている。六人の生徒は青山彩、空野翼、大場サチ、白井ユカ、雲井瞳、湧田龍之介である。彩、瞳、サチ、ユカは資料を調べたり、模造紙に書き込みをしたりしている。翼がCDラジカセを使って一九四一年(昭和十六年)十二月八日午前六時にラジオで放送された第一回の大本営発表を流す。この放送は幕が上がった後すぐに流れることになる。

「臨時ニュースを申し上げます。臨時ニュースを申し上げます。大本営陸海軍部、十二月八日午前六時発表。帝国陸海軍は今八日未明 西太平洋においてアメリカ、イギリス軍と戦闘状態に入れり。…」

龍之介がプロジェクターを通して真珠湾攻撃の映像を自立式のスクリーンに映し始める。

しばらくして翼が放送を止める。

雨の音が響いている。

ユカ 雨強くなってきたよ。なんかやばいんじゃない。

彩 ユカ、台風はまだ大丈夫だよ。

スクリーンには戦闘機が映されている。

戦闘機の下に「零戦二一型」という文字が現れる。

ユカ 零戦(れいせん) 二一(にじゅういち)型。

翼 ユカ、それは二一(にじゅういち)じゃなくて、二一(にーいち)型って読むんだ。

ユカ 翼、零戦(れいせん)って何？

翼 ゼロ戦のことだよ。真珠湾攻撃で大活躍した。

ユカ あーこれゼロ戦なんだ。ゼロ戦なら私も知ってる。で、零戦とゼロ戦、どっちが本当の名前なの？

翼 正式名は零式艦上戦闘機。ゼロは敵の使っている英語だから本当は零戦って呼ぶのが正しいんだけど、戦時中もゼロ戦って呼ばれてたみたいだね。真珠湾攻撃で使われたのがこの二一型で、日本が生んだ天才・堀越二郎によって設計されたんだ。

ユカ ゼロ戦って戦争が始まった頃は無敵だったんでしょ。

翼 そうだね。龍之介F4Fワイルドキャットを映して。

龍之介 オッケー。

龍之介がF4Fワイルドキャットをスクリーンに映す。

翼　これがワイルドキャット。戦争が始まった時に使われてたアメリカの戦闘機。

ユカ　ワイルドキャットって？

翼　山猫のこと。ゼロ戦はすべての面でこいつより優れていて、空中戦では圧倒的な勝利を収めたんだ。ただアメリカも太平洋戦争中期からゼロ戦以上の機能を持った新鋭機のF6Fヘルキャットを送り込んできたからね。龍之介、ヘルキャットを映して。

龍之介　オッケー。

龍之介がF6Fヘルキャットをスクリーンに映す。

翼　こいつがヘルキャット。

ユカ　ヘルキャットってどんな猫なの？

翼　地獄の猫だよ。

ユカ　なんか強そうだね。

翼　そしてB 2 9の登場だ。

龍之介がB 2 9をスクリーンに映す。

翼　こいつは戦闘機じゃなくって爆撃機だけどね。東京大空襲で東京に爆弾を落としたのがこいつ。広島に原爆を落としたのもこいつだ。

ユカ　ゼロ戦はどうなったの？

翼　レイテ沖海戦で特攻に使われてから、だんだん戦闘よりも特攻に使われるようになっていくんだ。

ユカ　私達が担当してる特攻か。

龍之介が映像を消し、スクリーンを片付ける。

彩　（大きなため息をついて）戦時中の文化についてはこれでほぼ完成。あとはユカ達の特攻の展示がまとまれば帰れるね。で、ユカ、例のインタビューどうなった？

ユカ　彩、ごめん。あれボツにしちゃった。

彩　何で？

ユカ　だってサチが担当したインタビュー全然だめだったから。

サチ　彩ちゃん、私ちゃんとインタビューやったよ。

彩　サッチャン、そのインタビューどうしたの？

サチ　昨日ユカちゃんに渡したら、ユカちゃん全然見ないでこんなんじゃだめだって突き返してきたの。

ユカ　そりゃ、突き返したくなるでしょ。

彩 何で？
ユカ サチ、「戦後七十()年後の今、気になることは何ですか」って質問の答え何だった。
彩 何だったの？
ユカ エロ。
彩 エロ！？
翼 いったい誰にインタビューしたんだ？
サチ 美奈さんだよ。
翼 美奈さんって？
彩 高田美奈さん。戦時中にこの学校の生徒だった人。
翼 それじゃその人って今八十過ぎのおばあちゃんだよな。で、そのおばあちゃんの気になることがエロなんだ。
サチ 私、エロなんて書いてないよ。
ユカ 書いてあったよ、でっかくエロって。それにイクラとか書いてあって。今気になることがエロとイクラじゃ戦後七十()年と全然繋がらないじゃない。ボツにするしかないでしょ。
サチ イクラって戦争に関係あるよ。
翼 サチ、何でイクラが戦争に関係あるんだ？
サチ イクラってアメリカと戦争したでしょ。
翼 それってイラクのことか？
サチ あっ…
ユカ 何、あれイラクのことだったの。サチ、イラクとイクラ間違えんなよ。
瞳 ユカ、イラクとイクラは間違えてもしかたないよ。
ユカ でも全然違うよ。
瞳 そうだけど、イラクとイクラだから、イラクと切り干しダイコンじゃないんだから。
サチ 私、イラクと切り干しダイコンは間違えないよ。
彩 サッちゃん。さっきのエロってもしかしてテロのことじゃない？
サチ そうだよ、テロだよ。私ちゃんとテロって書いたよ。
ユカ エロだったよ。
瞳 いいじゃない、テロでもエロでも。似たようなもんじゃない。
ユカ 瞳、テロとエロは似てないんじゃない。
サチ 私、テロって書いたよ。
ユカ エロだよ。
サチ じゃ証拠見せようか。

サチが美奈さんへのインタビューを書き取った紙をかばんから取り出す。

サチ ほら。
翼 (それを手に取って)…エロ。
サチ えっ！

ユカがそれを手に取る。

ユカ ほら、やっぱりエロって書いてあるよ。

瞳 ユカ、人間誰でも間違いはあるから。

ユカ でも普通の中学三年生はテロとエロは間違えないんじゃない。

彩 サッちゃん、私が書いて渡した他の質問はどうなったの？

サチ 私、全部インタビューしたよ。でも美奈さんが答えた内容がよくわかんなくて、書き取れなかったの。

ユカ それじゃインタビューにならないじゃん。

サチ 彩ちゃん。美奈さん、質問の答え書いて学校に届けてくれるって。

彩 そうなんだ。

ユカ で、それ届いたの？

サチ まだだけど…

ユカ じゃ、明日の文化祭に間に合わないじゃん。

翼 彩、美奈さんのインタビューってそんなに重要なのか。

彩 重要だと思う。

翼 どうして？

彩 美奈さんこの夏に放送された戦後七十（ ）年の記念番組に出てたんだ。美奈さんはその番組で戦争で亡くなったお兄さんの思い出を語ったんだけど、それがとってもよくって。それで美奈さんにインタビューして、展示で紹介できたらいいなって思ったんだ。

翼 そんなに重要なら彩が自分でインタビューに行けばよかったのに。

ユカ 何でサチに任せたの？

彩 それがね、美奈さんって、なんとサッちゃんの知り合いだったんだよ。

ユカ そうなの？

翼 サチ、どんな知り合いなんだ。

サチ 私のおじいちゃんと美奈さんのお兄さんの勇輝さん、親友だったんだ。私、毎年おじいちゃんと一緒に勇輝さんのお墓参りに行ってたの。そうしてるうちに、勇輝さんの妹の美奈さんと仲良くなって。

彩 というわけで、今回のインタビューはサッちゃんにお願いしたってわけ。

翼 戦争で亡くなった勇輝さんってどんな人だったんだ。

彩 あー、番組の中で紹介された内容、ここにメモしてある。(メモ帳を取り出して)名前、高田勇輝。勇輝っていう名前は「どんなときでも勇気を持って輝ける人になれ」って願いから両親がつけたんだって。その勇輝さん翼の好きなゼロ戦の搭乗員だったんだ。

翼 えっ、ゼロファイターだったの。それ知ってたら俺がインタビューに行ったのに。

彩 番組の中の再現ドラマで、勇輝さんって頭も運動も抜群だったって紹介されてた。

翼 そりゃそうだろ、海軍航空隊に入るのだから大変なのに、その中で選ばれた数少な

い人だけがゼロ戦の搭乗を許されたんだから。

彩 足の速さは誰にも負けなかったって。東京オリンピックの候補になるくらい。

ユカ 勇輝さんってこの前の東京オリンピックの候補だったんだ。

彩 この前じゃなくて、この前の前。

ユカ えっ、じゃあ今度の東京オリンピックって東京でやる三回目のオリンピックなの？

彩 そうじゃなくて、最初の東京オリンピックは中止になったの。

ユカ そうなの？

彩 第二次世界大戦が始まってオリンピックどころじゃなくなったからね。

瞳 悔しかっただろうね。

ユカ 勇輝さん、陸上での戦いができなくなった代わりに、空で戦うことにしたのかな。

彩 それは違うんじゃない。だってオリンピックと戦争は全然違う戦いだよ。オリンピックは負けても死ぬなんてことないじゃない。でも空の戦いは負ければ死が待っているんだよ。

翼 パラシュートで脱出できるけどね。

彩 でも死ぬ可能性の方が高いよね。それって本当に命をかけた戦いじゃない。

翼 だからカッコいいんだよ。なっ、龍之介。

龍之介 うん。

彩 でも人が死ぬんだよ。戦いに勝つってことは人を殺すってことでしょ。

翼 そうかもしれないけど、戦争なんだから…

彩 どうして戦争だと人を殺していいの？

翼 だってそれが戦争じゃないか。

彩 でもその戦争が勇輝さんを殺したんだよ。

翼 勇輝さんって空中戦で死んだのか？

彩 勇輝さんは特攻で死んだの。

翼 特攻で…

彩 うん、沖縄戦で行われた特攻で。

翼 そうなんだ。

彩 勇輝さん、妹の美奈さんに「必ず生きて帰ってくる」って約束してたんだって。そのこと思い出して美奈さん泣いてた。

サチ 美奈さん、自爆テロのニュース見ると、お兄さんのこと思い出しちゃうって言うてた。

彩 だから今気になることがテロなんだ。

ユカ 日本も自爆テロみたいなことやってたんだね。私わかんないんだよね、自爆テロやる人。だって自分も死んじゃうわけじゃない。

翼 ユカ、特攻は自爆テロとは違うよ。

ユカ テロとエロくらい違う？

翼 違うね。

ユカ 違うんだ。

翼 自爆テロはなんの罪もない民間人を犠牲にしているだろ。でも、特攻が目標にした

のは敵の戦艦だ。民間人を犠牲にする自爆テロとは違うよ。

サチ 戦艦には人は乗ってないんだ。

翼 それは乗ってるよ。でも民間人じゃない。そこに乗っているのは兵士だ。

サチ 兵士は死んでもいい人なんだ。

翼 いいわけじゃない。でも兵士が死ぬのは民間人が死ぬのとは違うよ。

サチ どう違うの？

翼 どうって、そういうもんなんだよ。

サチ そういうもんなんだ。

彩 そうなのかな。

翼 そりゃそうだろう。とにかく、特攻と自爆テロを一緒にしたら特攻で死んだ勇輝さんがかわいそうだよ。だから、美奈さんは自爆テロからお兄さんのこと思い出しちゃいけないんだ。

彩 でも、しかたないじゃない。自然と思い出しちゃうんだから。

風見翔と雨宮航が教室に入ってくる。

翔 偵察任務完了。

翼 翔、どうだった他のクラス。

翔 三年二組。『The Manga』だって。教室の中、漫画が山積みになっていた。

ユカ うわっ、それ思いつきり人集まりそう。

航 それと三年三組、アニメ特集。三組もきっとたくさん人集まるよ。

翼 龍之介、ちょっと見に行こうぜ。

龍之介 うん。

翼と龍之介が教室を出ていく。

翔と航がその後についていく。

彩、ユカ、サチもその後が続く。

瞳が一人教室に残る。

瞳は戦争の展示を見て回る。

そして瞳は机に向かってノートに何かを描き始める。

しばらくして彩が戻ってくる。

彩 瞳、何してるの？

瞳 (ノートを反射的に隠して) ちょっと。

彩 (瞳が隠したものを見て) 何、それ？

瞳 うん…

彩 何なの？

瞳 漫画。

彩 漫画？

瞳 うん、中学生対象の漫画コンクールに応募しようと思って。
彩 そんなコンクールあるんだ。
瞳 うん…
彩 瞳、その漫画見せてよ。
瞳 …
彩 お願い。

瞳が彩に漫画を見せる。

彩 これって、私達だよな。
瞳 (うなずく)
彩 何でみんな戦時中の格好してるの？
瞳 タイムスリップものにしようと思って。現代の中学生が太平洋戦争の真っ只中にタイムスリップしちゃう話。それ、私達をモデルにして創ってみようかなって。太平洋戦争を漫画で描く中学生なんてきつといいないよね。だから選ばれやすくなるかなって。
彩 面白いんじゃない。
瞳 ごめんね、かってにモデルにしちゃって。
彩 私はかまわないけど。
瞳 彩、戦争の時、私達みたいな中学生の女の子ってどうしてたかわかる。
彩 正確にいうと、戦時中は中学生の女の子っていなかったんだよね。
瞳 何で？
彩 (下手の展示を示して)ここ見て。これが戦時中の学校制度。戦時中の中学校って男子だけが通う学校で、女子は中学校へは行けなかったんだ。
瞳 女の子はどうしてたの？
彩 高等女学校に通ったの。
瞳 高等女学校？
彩 男子の中学校に当たる女子の学校。女子はそこで勉強したの。ただ、ほとんどの女子は工場とかで働いたみたいだね。(下手の展示を示して)ほら、ここにまとめてある。「女子は女子挺身隊という組織に入り工場で働いた」それと(展示を示して)学徒動員っていうのがあって、「戦争終了一年前の昭和十九年からは中学生と高等女学校以上の生徒は全員工場などで働いた」って。
瞳 私達と同じ年の女の子はみんな働いてたんだ。
彩 そうだね。
瞳 私達の学校って、戦時中どんな学校だったの？
彩 (下手の展示を指して)ここの「七つ森学園の歴史」ってところ見て。私達の七つ森学園は、戦時中「七つ森高等女学校」だったの。
瞳 そっか、ここは女子だけが勉強する学校だったんだ。
彩 それが、戦争が終わった後「七つ森女学院高校」になって、そこに中学ができて、何年か前に共学になって「七つ森学園」に名前が変わったの。

瞳 何だかややこしいね。

そこにユカ、サチ、翼、龍之介が戻ってくる。

彩 ユカ、サッチャン、ちょっといい？

彩がもんぺを取り出す。

彩 これはいてみて。

ユカ 何これ？

彩 もんぺ。

ユカ もんぺ？

彩 戦時中、女の子はほとんどこれをはいてたんだ。明日サッチャンと二人でこれはいて呼び込みやって。

ユカ 私が？やだ、こんなのはくの。

彩 仕事全然やらなかったんだから、これくらいやってよ。

ユカ 彩、私の夢はスクールアイドルになることなんだよ。スクールアイドルがこんなものはけるわけじゃないじゃん。

サチ ユカちゃん、売れるためなら何でもやるのがスクールアイドルなんじゃないの。

ユカ (窓の外を見て) ねー、雨強くなってきたよ、もう帰らない。

彩 台風はまだ大丈夫だって。

ユカ 私、家まで電車で一時間もかかるんだよ。

彩 私は一時間半だよ。

ユカ 電車止まったらどうすんの？

瞳 ユカ、予報では台風上陸するの今夜でしょ。まだ大丈夫だよ。

そんな話をしている間にサチがもんぺをはき終えている。

サチ 彩ちゃん、どう？

彩 サッチャン、似合うね。ユカもはいてよ。

ユカ 絶対やだ！

◆警報

翔と航が教室に飛び込んでくる。

翔 緊急事態発生。

彩 緊急事態？

航 教師二名がこちらに接近中。

彩 教師二名って？
翔 マッチーとゴッド神岡。
翼 ゴッドが一緒か、そりゃやばいな。
彩 みんな、どこでもいいから隠れて。

みんなが展示の裏側に隠れる。

雨の音が響く。

廊下から松本洋子先生と神岡光二郎先生の声が聞こえてくる。

その声はだんだんと三年一組の教室に近づいてくる。

松本先生と神岡先生が三年一組の教室に入ってくる。

松本先生はこのクラスの担任である。

松本先生は上手の「戦時中の大衆文化」の展示に近づき、それを見つめている。

神岡先生 どうしたんです？

松本先生 生徒を帰したときより、展示が進んでる気がして。

神岡先生 太平洋戦争について、よくここまで調べさせましたね。

松本先生 私は何もやってないんです。

神岡先生 またまた。生徒が展示のテーマに戦争を選ぶわけじゃないじゃないですか。

松本先生 本当に何もやってないんです。展示のテーマを「太平洋戦争」にしたって提案したのは学級委員の青山彩さんと空野翼さんなんです。

神岡先生 それ本当ですか？

松本先生 二人の方向性は違うんですけど。

神岡先生 どう違うんですか？

松本先生 空野さんはゼロ戦の映画見て感動して、それ以来戦闘機マニアになって。で、戦闘機について調べてます。

神岡先生 あー、それってわかる気がします。私も小学生の時『宇宙戦艦ヤマト』観て感動して、戦艦大和の模型を作りましたから。で、青山はどう違うんですか？

松本先生 青山さんは戦争を体験していない若い自分達が戦争を知らなくちゃいけないって思いから展示に取り組んでるんです。この夏に放送された戦争関連の番組を見られる限り見たって言うてました。

神岡先生 中学生がですか？ なんか子どもらしくないな。

松本先生 子どもらしいっていいことなんですか？

神岡先生 そりゃそうでしょ。

松本先生 でも、そんな子どもらしい生徒が七十()年前、本当の戦争に夢中になったんですよね。

神岡先生 …まっ、とにかく先生のクラスはいいですね、そんな優秀な生徒がいて。先生のクラスは大変だったんじゃないですか、生徒を帰すの。

松本先生 はい。「台風のため、全員下校することになりました」って伝えたら、みんなブーブー言って。今帰ったら展示が完成しないから、残ってやるって。

神岡先生　うちの生徒はみんな大喜びでした。まだ全然展示終わってないのに。でも私は子どもってそういうもんだって思ってますけど。

松本先生が窓の外を見る。
雨の音が響く。
そこに杉山美樹先生が入ってくる。

杉山先生　松本先生。

松本先生　はい。

杉山先生　先生のクラスの白井ユカって生徒、まだ家に帰ってないって、家庭から問い合わせが来てます。

松本先生　(えっ)私、二時間前に全員帰しましたけど。

杉山先生　家庭には、学校は一時に生徒全員帰宅させましたって伝えました。そしたら心配なんで場合によっては警察に連絡するって、

松本先生　警察…

教室のどこからか「警察」という声が聞こえてくる。
ユカの声である。

神岡先生　誰だ？

ユカが隠れている場所から出てくる。

神岡先生　白井、おまえ何でこんなところにいる。

ユカ　…

神岡先生　答えろ。

ユカ　展示が終わらないんで、それで…

神岡先生　おまえ一人か？

ユカ　いえ…

神岡先生　他にも誰か残ってるのか？

ユカ　…はい。

神岡先生　出てこい。

誰も出てこない。

神岡先生　出てくるんだ！

一人二人と生徒が出てくる。

松本先生 あなた達、どうして…

彩 展示…やってみました。

松本先生 (えっ?)

彩 全然完成してなかったから…私が、みんなに頼んで…

神岡先生 今すぐ下校しなさい。

杉山先生 神岡先生。ちょっと待ってください。

神岡先生 …

杉山先生 帰れないんです。

神岡先生 帰れない…

杉山先生 さっきから電車動いてないんです。今このあたりに大雨洪水警報が出ます。

松本先生 親に車で迎えに来てもらいます。

杉山先生 それが…

松本先生 …

杉山先生 道路もあちこちで通行止めに…

松本先生 …この中で徒歩で通学してるのは誰だっけ？

翔と航が手をあげる。

松本先生 あなた達はすぐ家の方に迎えに来てもらいます。

ユカ 私達は？

松本先生 あなた達は、電車通学よね。

ユカ はい。

松本先生 今は帰れないわね。

神岡先生 こうなったら、学校に泊まるしかないだろう。

ユカ 学校に…

杉山先生 松本先生、すぐに各家庭に連絡しないと。

松本先生 そうですね。

松本先生と杉山先生が教室を出ていく。

神岡先生 全員、職員室に来なさい。

みんな …

神岡先生が教室を出ていく。

翔と航が後続く。

翼 学校に泊まりか。

ユカ お風呂どうしたらいいの？

翼 風呂は無理だろ。

ユカ 私、明日学校休む。

サチ ユカちゃん、ここ学校だよ、休めないよ。

ユカ スクールアイドルを目指してる私が、お風呂に入らないで誰かに会うなんてできない。

杉山先生が戻ってくる。

杉山先生 白井さん、早くしないと家の人警察に連絡しちゃうよ。

ユカ あちゃー。

ユカが慌てて教室を出ていく。

その後他の生徒達も教室を出ていく。

嵐の音が響く。

暗転

暴風雨洪水警報

◆暴風雨

嵐の音が大きくなる。

舞台が明るくなると、六人の生徒が窓から外を見ている。

翼 風、すごくなってきたな。

龍之介 翔と航、もう家に着いたかな。

翼 いくらなんでももう着いただろ(う)。

ユカ 腹へったー。

サチ ユカちゃん、スクールアイドルは腹へったなんて言わないんじゃない。

ユカ でも…腹へったー。

瞳 彩、戦争の時って、食べるもの全然なかったんでしょ。みんなどうしてたのかな。

彩 (上手の展示物を指さして)これ、各家庭に配られた「捨てていたものの食べ方」ってプリントなんだけど。ここにのこぎりの屑の食べ方とか書いてある。

ユカ のこぎりの屑なんてどうやって食べるの？

彩 (展示を読んで)粉末にして小麦粉に入れてパンにするんだって。

ユカ うえー。

彩 それと、ここにはネズミって書いてある。

ユカ ネズミ！

彩 ネズミが捨てていたものって変だけどね。

翼 本当にネズミなんか食ったのかな。

彩 「味は鳥肉のごとし」だって。

ユカ 無理、無理。スクールアイドルを目指してる私は、ネズミは食べれない。
サチ ユカちゃん、みんなネズミは食べれないよ。
ユカ 腹へったー。

杉山先生が入ってくる。
服が濡れている。

ユカ 先生、どうしちゃったんですか、そんなに濡れちゃって。
杉山先生 近くのコンビニに行ってきたの。食べ物買いに。
ユカ さっすが先生。
杉山先生 でも、この嵐でしょ。コンビニ全部閉店。
ユカ あちやー。腹へったー。飢え死にするー。
彩 電車、まだ動きませんか？
杉山先生 動くの無理なんじゃないかな。
ユカ 大雨洪水警報か…最悪！
杉山先生 (あっ)さっきそれ、暴風雨洪水警報に変わった。
ユカ 暴風雨洪水警報！ 私達どうなるの？
杉山先生 校長先生に連絡したら、生徒と一緒に学校に泊まってくれって。だから私と松本先生と神岡先生の三人が泊まることになったから。

松本先生が教室に入ってくる。

彩 すみません。
松本先生 えっ？
彩 勝手なことして…
松本先生 (笑って彩の肩に手を置いて)もういいから。

松本先生がかばんから袋を取り出す。

松本先生 はい、差し入れ。

そう言って袋をユカに渡す。
袋の中にはお菓子が入っている。

ユカ (わーっ)どうしたんですか、これ？
松本先生 職員室の戸棚にあった食べ物。少しは腹の足しになるでしょ。
ユカ 先生、これ食べていいですか。
松本先生 どうぞ。
ユカ いただきますーす。

ユカがお菓子を食べ出し、それに続いてみんなも食べ出す。

松本先生 サッチャン、どうしたの？

サチ えっ？

松本先生 その格好。

サチ (あっ)これ、展示の呼び込みやるとき着てって彩ちゃんに頼まれて。

松本先生 (笑って)そのかっこうでおかし食べてると、なんか戦時中の女の子になったみたいだね。

サチ ありがとうございます。

ユカ サチ、何でお礼言ってるんだ。

松本先生 サッチャン。はい、これ。

松本先生はサチに紙袋を渡す。

サチ これ？

松本先生 高田美奈さんから届いたインタビューの答え。ごめんね、今朝届いていたんだけど、渡すの忘れちゃって。

サチ ありがとうございます。

杉山先生が松本先生に話しかける。

松本先生 それじゃ私達は校舎内見回ってくるから。

松本先生と杉山先生が教室を出ていく。

サチ (ユカに)ほら、私、ちゃんとインタビューの仕事してたでしょ。

ユカ はいはい。

ユカが紙袋からインタビューの答えが書かれた紙の束を取り出す。

ユカがそれを声に出して読み始める。

質問はスクールアイドルをイメージした口調(♡)で、その答えは八十過ぎのおばあさんをイメージした口調(♠)で読む。

ユカ 「♡ 戦時中の美奈さんの夢を教えてください」

「♠はい、私の夢は宝塚少女歌劇団の男役のトップになることでした。でも、宝塚は上演禁止になってしまいました」

瞳 何で宝塚が上演禁止になったのかな。

彩 宝塚って華やかなイメージがあるじゃない。「ぜいたくは敵だ」って時代だから、宝

塚は敵だったんじゃない。
瞳 宝塚が敵なんだ。
彩 ユカ、インタビューの続き読んで。
ユカ 「♡ 戦時中、好きだったことは何ですか」
「♠はい、私が好きだったのはレコードを聴くことでした。一番のお気に入りには『私の青空』でした」
彩 『私の青空』なんだ。
ユカ 彩、知ってるの？
彩 (上手の展示を見て) 確か戦時中に禁止された曲のリストに入ってたんじゃないかな。
あーあった、『私の青空』。
瞳 『私の青空』って禁止された曲なんだ。
彩 龍之介、ネットで『私の青空』検索してよ。
龍之介 オッケー。

龍之介がパソコンのキーボードを叩く。

龍之介 「『私の青空』・原題『My Blue Heaven』。歴史に残るジャズの名曲として数多くの有名な歌手によって歌われてきた。日本では昭和三年二村定一^{ふたむらていいいち}が歌い、十数万枚を売るという当時としてはかなりの大ヒットを記録した」
瞳 それが何で禁止になったの？
彩 あー、それはそこ、禁止された曲のリストの下に書いてある。

彩がそれを読む。

彩 「太平洋戦争が始まると、英語及びカタカナ排斥がエスカレートし、昭和十八年には内務省と情報局が『私の青空』など米英音楽千曲を敵性音楽としてリストアップし、演奏を禁止した。特にジャズは卑俗低調で退廃的と徹底的に排除され、飲食店からはもちろん、ラジオの音楽番組から締め出され、レコードはすべて回収された」
瞳 美奈さんって禁止された曲を聴いてたんだね。
ユカ 美奈さんの答え、まだ続きがあるよ。
「♠私は、日本の歌手が歌った『私の青空』はあまり好きではありませんでした。私が聴いていたのは本場アメリカの歌手が歌った『私の青空』でした」
彩 それってかなり危険なことだね。
翼 そうだな、もし見つかったら大変なことになっただろうな。
サチ 大変って？
翼 警察に連れて行かれるんじゃないか。
サチ 警察に！音楽聴いただけで？
翼 警察に連れて行かれるだけで終わればいいけど、下手すれば思想的に問題があるということで逮捕されて拷問ってことになったかもな。

サチ 拷問…

翼 美奈さんってけっこう危ない人だな。

サチ そんなことないよ。すごくいい人だよ。

ユカ 美奈さんの答え、まだ続きがあるよ。

「♣私が聴いていた『私の青空』が入ったCDが最近発売されました。懐かしくてすぐに買いました。そのCDを紙袋の中に一緒に入れたので、よかったら聴いてください」

ユカが紙袋の中からCDを取り出す。

ユカ 『往年のジャズ名曲集』。どうする、聴いてみる？

彩 インタビュー読んでから聴かない。

ユカ わかった。それじゃ次のインタビュー読むね。

「♡美奈さんが出演した番組で、お兄さんには結婚の約束をした恋人がいたことが紹介されていました。その人について教えてもらえませんか」

「♣兄の恋人は遠野みどりさんといいます。私はみどりさんと呼んでいました。戦争が終わったら二人は結婚することになっていました。宝塚を私に教えてくれたのはみどりさんです。『私の青空』を教えてくれたのもみどりさんです」

翼 みどりさんが美奈さんに教えたものって禁止されてるものばかりだな。みどりさんもけっこう危ない人だったのかもな。

ユカ まだ、続きがあるよ。

「♣私はみどりさんが大好きでした。そして今でも尊敬しています。みどりさんは歌が得意でした。オペラ歌手になることを夢見て勉強していました。しかし、オペラは禁止されてしまいました。オペラ歌手になるという道が閉ざされたみどりさんは、学校の先生になりました。そこで音楽を教えていたんです。あの当時の先生は『お国のために命を捧げることが大切だ』と教えていましたから、歌を通して『生きることの大切さ』を教えようとしたみどりさんは悪い先生だったのかもしれない」

瞳 「生きることの大切さ」を教えることって悪いことだったんだ。

彩 戦時中は命って大切じゃない方が都合がよかったんじゃない。

ユカ 続きを読むよ。

「♣でも、たくさんの、本当にたくさんの人が死んでいったあの時代に、『生きることの大切さ』を子ども達に伝えようとしたみどりさんはすごい先生だったと思います。

みどりさんはいつも生きることに前向きでした。宝塚を観ることも、『私の青空』を聴くことも、生きることなのだと、みどりさんは私に教えてくれました」

彩 みどりさんか…私、ちょっと会ってみたいかも。サッチャン、みどりさんって今どうしてるの？

サチ えっ、どうしてるのかな。

瞳 彩、戦争の真っ只中にタイムスリップしたら、みどりさんに会えるよ。

彩 そうだね。

ユカ タイムスリップ？

彩 瞳、漫画コンクールに応募するんだって。戦争の真っ只中に私達がタイムスリップする話で。

ユカ それじゃ、その話に私も登場するの？

瞳 うん。スクールアイドルを夢見る少女役で。

ユカ それいいね。で、どうなるの、私達。

瞳 それが、まだ話、全然できてないんだ。

ユカ 彩、瞳のために戦争の真っ只中にタイムスリップしたらどうなるか考えてあげない。

彩 いいけど。

ユカ それじゃいくよ。はい、たった今、私達は戦争の真っ只中にタイムスリップしてしまいました。

瞳 どうなるかな？

彩 怪しまれるんじゃない。

瞳 どうして？

彩 だって私達の格好どう見ても戦時中の子どもには見えないじゃない。

サチ 私、大丈夫だよ。だって私、もんぺはいてるでしょ。だから私は怪しまれないよ。

彩 でもね、その当時の人と話を合わせるのは難しいと思うけど。

サチ 大丈夫。私、うまくごまかすよ。

彩 サッチャン、ここは戦争の真っ只中です。サッチャンはその時代にタイムスリップしてしまいました。町の女の子がサッチャンに話しかけます。「あなた誰？」

サチ 「転校してきた大場サチだよ。よろしくね」

彩 「転校って、大場さん学校に行ってるんだ」

サチ 「うん、中学校に行ってるよ」

彩 サッチャン、もうボロ出てるよ。

サチ 何で？

彩 瞳、教えてあげて。

瞳 戦争の時の中学校って男子だけが通う学校なんだって。

サチ そうなんだ。

彩 というわけで、サッチャンは中学校へは行けないの。

サチ 「間違えちゃった。私が通ってるのは小学校だった」

ユカ サチなら小学生で通るね。

彩 だめだめ。

サチ 何で？

彩 アメリカとの戦争が始まる年に小学校は名前が変わって国民学校になるの。だからその当時、小学校は存在しないの。

サチ 彩ちゃんって、戦争の頃から私達の世界にタイムスリップしてきたんじゃないの。戦争の頃のこと詳しすぎるよ。

瞳 彩、戦争の真っ只中で怪しまれずに生きていくって簡単じゃないね。

彩 私がこだわりすぎるのかな。

瞳 そうかもしれないけど、私、そんな彩が納得する漫画描きたいな。

ユカ ねっ、この町って空襲にあったんだよね。

彩 うん。

ユカ 空襲があった日にタイムスリップしたらどうかな。空襲の中ならみんな自分のことで精一杯で、私達が誰かなんて気にする余裕ないんじゃない。

瞳 この学校、その時の空襲で燃えちゃうんだよね。

彩 うん。(下手の掲示物を読む)昭和二十年五月二十五日、空襲で木造校舎全焼。

瞳 決めた。私達がタイムスリップするのはこの町に空襲があった日。タイムスリップする場所はこの学校の教室の中。

雷

ユカ 雷だね。

瞳 (窓から外を眺めて)あー、こういうのどうかな。文化祭の前日、台風で家に帰れなくなった生徒達が戦争の展示を作っているの。窓の外からサイレンとともに防災無線が聞こえてくる。「暴風雨洪水警報が出ているので注意してください」。

雷

瞳 今みたいに空に稲妻が走って、雷鳴が轟くの。近くに雷が落ちたと思って窓の外を見ると、それは雷じゃなくて爆弾だった。そして暴風雨洪水警報のサイレンは、いつの間にか空襲警報のサイレンに変わっていた。私達はなんと太平洋戦争の真っ只中の昭和二十年五月二十五日にタイムスリップしてしまったのだ。

ユカ 瞳、それ面白いよ。

雷

瞳 次々と爆弾が落とされる。そして次々と火柱が上がる。彩、私達どうしたらいい。

彩 逃げるしかないんじゃない。だってその空襲でこの学校全焼しちゃうんだから。

瞳 どこに逃げたらいいかな？

彩 あそこの七つ森に逃げるしかないんじゃない。

みんなが七つ森がある前方を眺める。

ユカ (大声で)バーン。

みんながびっくりする。

サチ ユカちゃん、びっくりさせないでよ。

瞳 ユカ、今の何？

ユカ タイムスリップした学校の校舎に爆弾が直撃したの。

◆停電

落雷

思わず叫ぶ生徒達。

停電

ユカ 何？ どうしちゃったの？

翼 今の雷、学校に落ちたんじゃないか。

龍之介 うん。落ちたと思う。

サチ 学校に雷落ちても大丈夫なの。学校燃えないの。

龍之介 大丈夫だよ。学校には避雷針があるから。

翼 サチ、雷って学校の中にいれば安全なんだ。

ユカ ねっ、だれか電気つけて。

翼 ユカ、電気つかないよ。停電なんだから。

龍之介が展示の照明効果を高めるための非常用ランタンを中央の机に持ってきて
明かりを灯す。

他の机にも非常用ランタンが置かれていき、明かりが灯される。

龍之介 展示の雰囲気を出すために用意した非常用ランタン、役に立ったね。

瞳 (窓の外を見て)この学校だけじゃなくて、町中が停電してる。

雷

瞳 なんか変な気分。

彩 変な？

瞳 本当に戦争の真っ只中にいるみたい。タイムスリップして。

彩 (窓の外を見て)確かに灯火管制みたいだね。

サチ 灯火管制？

彩 空襲の時、町に灯りがついているとそこが標的にされちゃうじゃない。だから警報
が出るとみんな灯りを消さなくちゃいけなかったんだって。

ユカ 真っ暗な中で、何してたのかな。

サチ 美奈さん、音楽聴いてたって言ってた。

ユカ 音楽、それいいね。私達も何かかけようよ。

翼 かけれないよ、停電だから。

龍之介 そこのCDラジカセ使えばかけれるよ。電池入ってるから。

翼　でもここにCDなんてないだろ。
彩　あるよ。ほら、美奈さんがインタビューと一緒に渡してくれた。
ユカ　あー、『私の青空』。
彩　私、聴いてみたいな、『私の青空』。
サチ　私も。
ユカ　それじゃみんなで聴こうよ。

ユカがCDケースからCDを取り出し、それをCDラジカセにセットする。

瞳　『私の青空』って禁止された曲なんだよね。聴くのちょっとドキドキする。
ユカ　かけるよ。

英語版の『私の青空』がかかる。
みんなその明るいメロディーにとまどう。

瞳　これが禁止された曲？イメージと違う。
ユカ　美奈さん、こんな感じで聴いてたのかな？
彩　こんな大きな音じゃ聴けなかったろうね。警察に聞かれちゃうから。

ユカがボリュームを下げる。

ユカ　こんな感じかな？
彩　こんな感じじゃない。
瞳　これ何て歌ってるの？
ユカ　（CDケースを開けて解説を取り出して）ここに訳詞があるよ。えっと「恋しい家こそ、私の青空」。
彩　青空って大好きな自分の家のことなんだ。

雷

サチ　この歌、台風のへそみたいだね。
翼　台風のへそ？何だそれ？
サチ　知らないの？　台風の真ん中って晴れてるんだよ。そこがへそだよ。
翼　サチ、それ台風の目だよ。
サチ　あっ…
彩　サッチャン、何でこの歌が台風の目なの？
サチ　外は嵐だけど、ここは青空だよ。

みんなが『私の青空』に耳を傾ける。

サチ 戦争の時、美奈さんの家、青空だったのかな？

彩 青空？

サチ うん。外、空襲で爆弾落ちるでしょ。町中真っ暗でしょ。でも美奈さんの家は青空だったのかな？

ユカが『私の青空』のボリュームを上げる。

嵐の中『私の青空』が響く。

ユカが切りのよいところで『私の青空』を止める。

雷

彩 ユカ、インタビューの中に、空襲についての質問があるはずなんだけど。

ユカ (インタビューの質問の中に空襲という文字を探して) 空襲、空襲、あっ、あった。

「♡ 七つ森高等女学校が空襲で焼けてしまった日のことを教えてください」

彩 美奈さん何て？

ユカ 「♣七つ森高等女学校が空襲にあった日。それは忘れることができるなら忘れてしまいたい日です。でも、忘れることができない日です。私は今まであの日のことを誰にも話しませんでした。でもあの日のことは伝えていくべきことなのですね。私は、みなさんにあの日のことを伝えたいと思います。

あの日の夜、私は空襲警報で目を覚ましました。慌てて外に出て空を見上げると、そこにたくさんのB 2 9が飛んでいました」

瞳 B 2 9ってさっきスクリーンに映した飛行機だよ。

龍之介 あー、その掲示物に写真貼ってあるよ。

龍之介が舞台中央の掲示物の一番上を指差す。

そこにB 2 9の写真が貼ってある。

龍之介がそれを携帯用ランタンで照らす。

瞳 そのB 2 9がたくさん飛んでたんだ。

雷

それはまるでB 2 9による爆撃のように響く。

ユカ 「♣空からたくさんの爆弾が降ってきました。右から左から前から後ろから火柱が上がりました。私達家族は七つ森高等女学校に向かって避難しました。学校に着いたとき、爆弾の一つが学校を直撃しました」

落雷

翼　　また学校に落ちたんじゃないか。

サチが泣き出す。

瞳　　サッチャン、大丈夫。大丈夫だよ。

翼　　サチ、学校の中は安全だって言ったろ。雷くらいで泣くなよ。

サチ　　違うよ。

翼　　違う？

サチ　　雷は怖い。でも違うよ。

翼　　何が違うんだよ。

サチ　　空襲があった日の美奈さんのこと考えたら…

落雷

サチ　　美奈さん、学校に爆弾が落ちるの見たんだね。

彩　　そうだね。

サチ　　雷でもこんなに怖いのに、これがもし爆弾だったら。

彩　　怖いなんてもんじゃないね。

サチ　　美奈さん、そんな爆弾が落ちてくる中逃げたんだね。

彩　　そうだね。

サチ　　そんな恐ろしいこと思い出したくないよね。

彩　　思い出したくないね。

サチ　　でも、美奈さん思い出してくれたんだね。

彩　　そしてそれを届けてくれた。私達のために。

ユカがインタビューが書かれた紙を見つめている。

彩　　ユカ、続き読んでよ。

ユカ　　わかった。(ユカの読み方が、今までの読み方と明らかに変わる)「私達の学校は炎に包まれました。私達は学校の前にある七つ森に向かって走り出しました」

瞳　　(窓の向こうにある七つ森を指して)美奈さん、あそこに向かったんだね。

雷

ユカ　　「学校が燃えているのを七つ森から眺めていました。学校だけではなく、町全体が燃えていました。狂ったように叫んでいる人がいました。震えている人がいました。呻いている人がいました。泣いている人がいました。私は地獄ってこんなところなのかなって思っていました」

瞳　　地獄か…

遠雷

ユカ 「次の日、私達は家への道に戻りました。建物という建物がみんな焼けて壊れていました。道にはたくさんの人が死んでいました。あんまりたくさんの人が死んでいたの、死んでいる人を見ることが怖いと思いませんでした」

嵐の音

ユカ 「私の家は…ありませんでした。空襲で焼けてしまいました。大好きなレコードも焼けてしまいました」

嵐の音

彩 焼けちゃったんだ、『私の青空』。

ユカ （声がつまる）「そして…」

瞳 ユカ、どうしたの。

ユカ 「そして…その空襲で、みどりさんが死にました。私に生きることの大切さを教えてくれたみどりさんが、大好きな、大好きなみどりさんが死んでしまいました」

嵐の音

サチ みどりさん、死んじゃったんだ。

彩 会ってみたかったのに。

嵐の音